

寄稿 私の心から尊敬する師匠、金壽卿先生

チェ ウン グ
崔 應 九

※本稿は2013年11月に開催したシンポジウムに際して、寄稿いただいたものである。
当日は、この文章を受け取った金恵英・金泰成両氏がこれを読み上げた。

まず、私たちの尊敬する師匠である金壽卿先生を称えてシンポジウムを開催してくださった主催者側と先生方に厚くお礼申し上げます。

〔金〕^{ヘヨソ}恵英さんの依頼により、私の見た壽卿先生に関して簡単に書いてみたいと思います。

私は1961年9月、延辺大学朝文学部を卒業し、中国人留学生の身分で金日成綜合大学の研究院〔大学院〕に行き、3年間、研究生（大学院生）として勉強しました。そのときの私の指導教授が金壽卿先生だったのです。当時、同じクラスで勉強した研究生は3人でした。綜合大学で教鞭を執りながら研究していたパク・ヨンスン（박용순）*1さんと、中央党機関で勤務しながら勉強していたハン・ジョンジク（한정직）*2さんでした。私たちは文体論を勉強していました。しかしながら、その頃は平壤^{ピョングヤン}とソウルのいずれにおいても、まだ文体論研究が始まる以前のことでした。

授業の最初の時間に、壽卿先生はフランスの文体論の本を持ってこられ、

*1 パク・ヨンスン（박용순）：後に金壽卿『朝鮮語文体論』（高等教育図書出版社、1964）を土台として『朝鮮語文体論』（金日成綜合大学出版社、1966）を著述。

*2 ハン・ジョンジク（한정직）：朝鮮労働党中央党学校教員等を歴任。

はじめから朝鮮語でお読みになりました。私たちはそれを熱心に筆記しました。私は非常に不思議に思って、休み時間に先生のフランス文体論の本を通覧してみたのですが、全部フランス語で書かれており、朝鮮の文字は一字もありませんでした。講義の終わった後、ヨンスンさんに聞いたところ、壽卿先生はさまざまな外国語がとてもお上手で、スターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』^{*3}も壽卿先生が読みあげたものを弟子たちが書き取って出版したものだと言っていました。

フランスの文体論の講義が終わってから、中国の有名な言語学者・陳望道先生の『修辞学発凡』〔原著は1932年初版〕をまた同じように読み下されました。中国の古文と現代文が混ざった、中国人にも読みにくい本でした。同じ本を見ている私に、間違ったところはないかと聞かれました。私は間違ったところを1つも見つけられませんでした。私は内心、世の中にはこんな方もいらっしゃるのだなと感嘆しました。先生は7ヶ国語をああいいう風にこなされるのだと、友だちが教えてくれました。

先生が書かれた『朝鮮語文法』^{*4}と『現代朝鮮語』全3巻〔1961-62年刊〕は、朝鮮民主主義人民共和国の中学校や大学で教科書として使用されたばかりでなく、〔1945年8月の〕解放後、同国の国語学の基礎となりました。先生が書かれた『朝鮮語文体論』〔1964年刊〕は朝鮮語学の新しい領域を開拓したものです。

そして多くの弟子を育てました。現在、朝鮮社会科学院言語学研究所の所長をはじめとし、語学界で中堅的な役割を果たしているほとんど全ての人が、1950年代や60年代に総合大学を卒業した、壽卿先生の教え子です。

先生はいつも謙虚な態度で、慈しみ深く、温かい方でした。学生たちは

^{*3} スターリン『マルクス主義と言語学の諸問題』：原典は1950年にソ連で出版、朝鮮語訳は朝鮮労働党出版社から1952年に出版。

^{*4} 『朝鮮語文法』：金壽卿が関わった同題の文法書は1949年、1954年、1960年、1964年に出されているが、そのうちどれを指すかは不明。

みんな親しげに、先生をただ「壽卿先生」と気軽に呼びました。学生のころ、先生は私をご自宅に招かれ、食事を共にしたことがあります。1990年代になっても、平壤に行った私をご自宅に呼び、一緒に食事をなさいました。平壤市内のキムチュク金策工科大学近くに引っ越して来られていたのですが、私は先生のお宅に入ってみて大変びっくりしました。壁にかけた、色褪せた小さい掛け軸が目についたからです。それは、私が学生の時、先生にさしあげた贈り物だったのです。先生は掛け軸を指さしながら、これを見る度に私を思い出していたとおっしゃいました。30年以上も前に1人の弟子がくれた小さな掛け軸1つを、黄色く色褪せるまで壁に飾ってくださった先生の心が、私の心に触れてじんと来ました。

時間の関係もあり、これで終わらせていただきます。

先生のご冥福をお祈りいたします

ありがとうございます。